二つの山小屋　No. 36

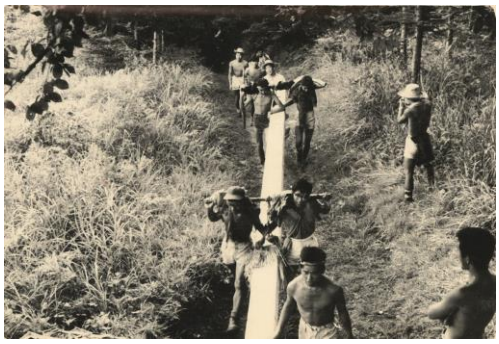
上智大学は、長野県小海町と群馬県みなかみ町に山小屋を持っている。1935 年に山岳会のメンバーが中心となって建設した八ヶ岳ヒュッテと、1963 年にワンダーフォーゲル部（以下ワンゲル）メンバーが建設した宝台樹（ほうだいぎ）ヒュッテである。どちらも、学生たちの汗と努力の結晶だ。

八ヶ岳ヒュッテ（1943 年撮影）

1. 八ヶ岳ヒュッテ

ヒュッテ建設は 1932 年、「自分たちの山小屋を持ちたい」と考えた上智山岳会のメンバーを中心に自主的に進められた。長野県の稲子湯旅館の経営者の案内で、小海駅から 50 分、稲子湯バス停から約 2 時間登った場所に決めた。この標高 1,600 メートルの土地は、当時白樺林に囲まれた草地だった。資金を大学から借り、設計はイエズス会のドイツ人建築士で本学一号館建築の監督をしたイグナチオ・グロッパーに依頼した。スキー場建設のために近くで伐採されたカラマツの角材を学生達が麓の製材所から担ぎ上げ、壁の内側にフェルトを張り、頑丈で寒気を防ぐ工夫を施した。ヨーロッパ式ログハウスは当時の日本では珍しい工法で、『ログハウス・プラン』誌（1991 年 5 月 25 日号）は、「これが国内最古」と思われるとしてこのログハウスを紹介した。1 階には薪ストーブを設置し、冬でも暖かい山小屋となった。その後、第二次大戦の混乱により、山岳部による建設資金の返済と運営は困難になり、大学がヒュッテの管理を引き受けることになった。

ヒュッテの中は、1 階中央の薪ストーブの周囲に食卓、台所、食器棚と 4 畳の寝室があり、煙突の通る 2 階中央部は吹き抜けになっており、四方に寝室がある。大学の山小屋らしさを示すのは、寝室の壁に打ち付けられている板に火箸で刻まれたゲーテの「漂白者夜の歌」だ。ヒュッテ建設に携わった山岳会メンバーがその後ドイツ留学中に戦争を経験し、その苦労を噛みしめて刻んだものといわれている。



資材を担ぎ上げるワンダーフォーゲル部員たち（1963 年夏）

2. 宝台樹ヒュッテ

戦後、上智ワンゲル部は山岳部の建設した八ヶ岳ヒュッテに刺激を受け、1957 年の結成当初から自分たちの山小屋を作りたいと願った。部員たちは、1962 年、群馬県みなかみ町にある武尊山の南面中腹を建設場所に選んだ。ここは八ヶ岳ヒュッテを建てる際に候補に挙がった場所でもあった。そして、ワークキャンプと呼ばれる建設作業を行った。大学が創立 50 周年を迎える 1963 年の春、部員たちは雪かきをした後、バールやツルハシで岩を動かして整地し、砂利やセメント、大量の石などの資材を担ぎ上げた。肉体を限界まで酷使した夏合宿は「きつい」を超えて「過酷」で、退部する部員も出た、と参加者は部誌『はばたき』（40 周年記念号、1998 年）に記している。部員たちは資金調

宝台樹ヒュッテ（1963 年 11 月竣工）
1 階は石組み、2 階はアルミニウム製

達のために建設現場等でアルバイトをするほか映画会や音楽会を何度も開催し、「若いエネルギーを爆発」させて山小屋建設のために汗を流したという。

それだけに、1963 年 11 月 23 日、銀色のアルミニウム壁に覆われた上智大学宝台樹ヒュッテが完成した時の感動は、ひとしおだった。「これほど美しい山小屋がかつてあっただろうか」と、第一期生の杉井正長氏は同部誌で述懐している。

宝台樹ヒュッテ（2009 年撮影）

しかし、このアルミニウムが露結の問題を引き起こし、加えて台風で 2 階部分が破損した。そのため 1982 年、大学の資金援助を受けて、木造 2 階建ての新たな「宝台樹ヒュッテ」が完成した。1 階に台所、居間、水洗トイレ、シャワー室があり、2 階が寝室になっている。谷川岳をのぞめるこの新ヒュッテの管理・運営は、大学に移管された。